

第14回 桃太郎カップ水球 【戦評】

会場：倉敷市屋内水泳センター

【2021/12/25】

女子決勝

京都府選抜 22

5	—	5
6	—	4
7	—	2
4	—	5

16 山口水球クラブ

審判：

中 哲朗
荻野 浩明

京都府選抜	36	SH数	39	山口水球クラブ
	3	速攻数	3	
	21	ST・SB	15	
	15	SH・P誘発アシスト	15	
	43%	GK阻止率	27%	
	12	EX反則数	10	

ST・SB：ボール奪取・SH阻止

【試合の流れ】

夏のジュニア大会を制した京都に対して、山口が挑む図式となった決勝戦。京都の城之下・大前、山口の福田・三田という双方にコンビで軸を構成する選手がいるなど、似たようなチームカラー同士の決勝戦。

1P

試合開始直後の山口の攻撃を、京都の大前が中盤でのプレスディフェンスでボールを奪い、自身そのまま攻め込んで先制点をあげたが、この先取点に関わる攻防がその後の勝負の大きな伏線となった。その後は、山口は福田のミドルレンジからのシュートを軸に、京都は城之下の広範囲な動きと大前のセンター攻撃の応酬で、双方の攻撃回数のたびに1点を取り合うゲームとなった(京都5-5山口)。両チームともにディフェンス面をどう整備して試合をコントロールするかがカギとなりそうな立ち上がりとなった。

2P

このピリオドも似たような展開が続く、第1ピリオドに比べるとディフェンスでのプレッシャーが弱くなり、双方がどんどんシュートにまでボールを運べる状況に。いわゆる「ノーガードの打ち合い」様相を呈してきた。その証拠に前半の2ピリオドで、両チームのシュート本数が20本に達してきたが、そうした取って取られての応酬から変化してきたのがこのピリオド残り1分を切った京都の攻撃。軸となる大前、城之下の退水誘発プレーを確実に決めては2点差をつけた状態で前半を終えた(京都11-9山口)。

3P

山口の攻撃は外周からの福田のシュート、インサイドでの三田のプレーという状況を読み切った京都が、そうしたポイントで競り勝ち、やや手薄となった山口守備陣の裏について連続得点して、一気に突き放した。5連続得点を含む7点を奪うビッグピリオドとなり、完全に京都ペースとなった(京都18-11山口)。

4P

後がなくなった山口がピリオド開始からどんどん攻撃をしかけて連続得点し、京都18-13山口と少し追い上げムードになった場面で京都がタイムアウトで気分転換。絶妙のベンチワークが光り、その後もしっかり落ち着いたプレーで試合をコントロールした。城之下は、自身が抜けている場面でも焦らずボールをキープして前線にまで泳ぎ、しっかり時間を使って余裕の試合運びを見せるなどして試合終了(京都22-16山口)。夏の覇者はここでもしっかり結果を残した形となった。

【プレー分析から】

この試合では双方合わせてエクスクルージョンが22本、ゲームエクスクルージョン選手が4人(京都3人、山口1人)とお互いに守備面での課題が浮き彫りとなった。また、中心選手にボールが集まる傾向があり、守備側も的を絞りがやすくなったことからターンオーバーとなるのが非常に多くなった。ではその分、速攻に持ち込めるかと思いきや、速攻はごくわずかで(両チーム3本のみ)、いわば「がっぷり四つ相撲」的な水球を最初から最後まで通した形となった。その結果、お互いのチームシュート本数が40本近くにまで達した。今後は両チームともに攻守のバランスをどう向上させていくかという課題が明確化した決勝戦となった。具体的にはシュートにまで至らないような守備を身に着けておけば、もっと自チームのリズム形成につながるものと思われる。